

Title	旅する商人の知恵： サヴァリ『商業総合事典』からみた『百科全書』パリ版とルッカ版の比較の試み
Sub Title	Transformation de la pratique des commerçants
Author	小嶋, 竜寿(Kojima, Ryuji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.104, (2013. 6) ,p.220(125)- 235(110)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

旅する商人の知恵

— サヴァリ『商業総合事典』からみた
『百科全書』パリ版とルッカ版の比較の試み —

小嶋 竜寿

はじめに

古今東西、事典は関連文献の参看によって編纂されてきた。『百科全書』パリ版 *Encyclopédie* (1751-1772) も例外ではない。ゆえに『百科全書』はもはや単独の書物としてではなく、常に周縁の書物との関係性のうちにその性質が探られるようになっていく。ある時は先行文献から流れこむ知の結節点として¹、またある時は、自身の商業的成功によって陸続と刊行された後続版の祖本としての役割が浮き彫りにされてきた²。それぞれの場面で与えられた役割は違えども、受容史の観点から、『百科全書』パリ版は啓蒙思想の生成と展開の舞台として、その意義が改めて見直されるようになってきたといえるように思われる。

一方、典拠として『百科全書』に取り込まれた文献に視点を移すと、それ自身の系譜をもつものも少なくない。『百科全書』との接触は、それがいかに大きな流れになったとしても、自身の系譜の一部から派生し、その受容史を形成する一要素ととらえることができる。したがって、『百科全書』の変遷の追跡は、ある文献に記された知識の伝播様態を跡づけることに他ならないといえるのではないだろうか。

本論では、ジャック・サヴァリ・デ・ブリュロン Jacques Savary des Bruslons (1656-1716) およびフィルモン＝ルイ・サヴァリ Philemont-Louis Savary (1654-1727) によって編纂された『商業総合事典』*Dictionnaire universel de commerce* (初版1723-30) を取り上げ、この文献をともに典拠として用いた

『百科全書』パリ版とルッカ版を比較することにより、サヴァリ兄弟の事典の受容を辿ってみたい。

1. 『商業総合事典』と『百科全書』パリ版

1-1. 『商業総合事典』の系譜

『商業総合事典』は、国内商工業および、国外との通商問題に関してフランスではじめて編纂された専門事典である。編纂準備は重商主義政策下の1686年に開始されたという。ナントの勅令廃止により、従来金融や商工業の発展を支えていた数多くのユグノーが国外へ逃れた直後である。当初、サヴァリ・デ・ブリュロンは個人的に情報を収集した備忘録であったが、のちに公的な後ろ盾を得て、アルファベット順に整理され、事典としての体裁をなすに至った³。

1675年の刊行から18世紀末まで版を重ねて国内外に広まった『完全なる商人』*Le Parfait Négociant*のジャック・サヴァリ(1622-1690)は兄弟の父である。この著作は13世紀イタリアで生まれた「商人の手引き」の流れを受け、フランスでの展開を担っていたという⁴。そして父の著作を事典の重要な典拠としていた『商業総合事典』は、「商人の手引き」の事典版としても位置づけられるだろう。

初版は準備開始から37年後、1723年にフォリオ版二巻本で刊行された。だがこの長い期間の途中、1717年にサヴァリ・デ・ブリュロンは鬼籍に入ってしまう。編纂作業はもとより、サン＝モール＝デ＝フォセの司教座聖堂参事会員であった兄フィルモン＝ルイの協力を得ながら進められていた。したがって、弟亡き後、編纂はこの兄の手に委ねられ、継続されることになる。そして、1730年にフォリオ版一巻の補遺巻が刊行された。これら三巻本をもって初版が完成されたのである。だが、補遺巻の刊行を待たずして、フィルモン＝ルイも1727年にこの世を去っている。『商業総合事典』はのちに版を重ねるが、サヴァリ兄弟が実際に編纂に携わったのは初版のみであった。

初版刊行後、事典はフランス国内のみならず、スイスでの刊行のほか、

イギリス、イタリア、ドイツで翻訳版が出版されていることから、概ね好意的に受け入れられたようである。では、サヴァリ兄弟のまとめた事典はどのように展開したのだろうか。ここで、『百科全書』に直接関わりのあるフランス語で書かれた版本に限定するが、『商業総合事典』の刊行史を概観しておこう⁵。

まずもっとも早い反応をみせたのは、アムステルダムであった。初版の刊行に並走し、1726年から1732年にかけて、判型が一回り小さい四つ折り版で刊行されている。巻数は初版に比べて四巻本に増え、組版は異なるが、内容面での変更は加えられていない。フランス国内では、1741年と1748年にパリのエチエンヌ書店からフォリオ版三巻本で刊行されている。1741年版では、まず初版の二巻本と補遺巻の項目が統合された。また、初版における項目「商業」が「商業の現状についての概括」として、第一巻の本文の前にまとめられている。この版本においても項目の増改訂は認められない。そして、ページ数や文字の配置から、1748年版は1741年版の重版とみなすことができる。また、1750年にも同書店から四冊三巻本として刊行されているようだが、この版本には疑問点が残る。なぜなら、ジュネーヴのクラメールおよびフィリベール書店の刊行案内が含まれているなど⁶、1750年にパリで刊行された第六版という旨が記載されているタイトルページを除き、この版本は、後に触れる同年刊行のジュネーヴ版がそのまま刊行されているように思われるからである。その後、エチエンヌ書店は改訂版の刊行を企てるが、趣意書の発表にとどまり、事典の刊行には至っていない⁷。つまり、アムステルダム版を含むパリで刊行された諸版本では、構成は異なるものの、独自の項目改訂が一切行われていなかったといえる。

増補改訂が行われたのは、ジュネーヴ（1742年、1750年）およびコペンハーゲン（1759-65年）で刊行された版本であった。表紙に認められる刊行地は異なるものの、出版者はいずれもクラメール書店とフィリベール書店である。ジュネーヴで刊行された版本は、それぞれフォリオ版四冊三巻本（三巻中、第一巻は二分冊）、コペンハーゲン版はフォリオ版五巻本であっ

た。これらの版本では、それぞれ項目の書き換えや加筆が行われている。とりわけ後者は決定版とみなされ、これ以降増補改訂版が刊行されることはなかった。1750年刊行のジュネーヴ版については、先に触れたように、パリで同年に刊行されているとされる版本との違いが判然としない。ただし、1759年版に掲載された「AVIS SUR L'EDITION de GENEVE de 1750」を参照すると、この文が1750年のパリ版に掲載されたものと同じであることを確認できる。さらにこの文を1742年のジュネーヴ版の「AVIS SUR CETTE EDITION」と比較すると、1750年版の文は1742年版の一部のみを変更したものであることが判明し、パリの出版者が独自に作成したものであるとは考えにくい。つまり、1750年に刊行された版本は、刊行地がパリとなっているとはいえ、ジュネーヴの版本の系譜に含まれることが推測されるのである。

以上のことから、『商業総合事典』にも独自の系譜が存在するといえるだろう。この系譜は、パリ版を中心とした、1723年から1748年まで内容面に変化のない系統と、1742年に端を発し、1765年にかけて増補改訂が行われたジュネーヴ・コペンハーゲン版の二つの系統から形成されている。『商業総合事典』は表題を同じくしたまま⁸、中身を変容させながら伝播していたのである。では『百科全書』は『商業総合事典』のいかなる版本を選んだのだろうか。また、その選択によってどのような知見が引き継がれたのだろうか。

1-2. 『百科全書』パリ版が選んだ『商業総合事典』

『百科全書』が用いた『商業総合事典』は、恐らく1741年か1748年に刊行されたものであろうと推測される。というのも、『百科全書』に参考文献として記載されたサヴァリの事典のページ情報が合致するのは上記の版本に限られるからである⁹。『百科全書』がはじめて世に出された1751年当時、増補版が出され、少しずつ情報が刷新されはじめていたサヴァリの事典だが、『百科全書』には初版三巻本の情報が利用されていたことになる。

では、サヴァリの事典は、『百科全書』のいかなる領域で使用されたのだろうか。『百科全書』の分類符号からみると、「貨幣」や「染め物」などといった様々な領域で援用が認められる。だが、もっとも頻繁に援用されていたのは「商業」に分類された領域であった。シカゴ大学のサイトによれば、1942項目が商業の領域として分類され¹⁰、そのうち826項目で、サヴァリあるいは『商業総合事典』の名が参考文献として明示されている。当時の通商あるいは商工業に関わる唯一ともいえる専門事典にしては、さほど参照されていないようにも思われる。しかし、実際に両事典の項目を比較してみると、明示情報とは異なる実態が浮かび上がった。参考文献として明示されていない項目を含めると、1491項目でサヴァリの事典の項目が改変されることなく援用されていたのである。また、本文全十七巻を通じて、常に高い比率を維持したままコピーされていたことも確認できる。これらの情報から、『商業総合事典』は『百科全書』の商業にかんする項目群の屋台骨としての役割を担っていたと推測できるのである。

つづいて、サヴァリの事典を典拠としたのは誰か。商業に関する項目の半数以上は無署名であり、確定できる執筆者は二十名余りであった。中でも、マレ、デイドロ、ジョクールの執筆数は群を抜いている。とりわけマレは430項目を執筆し、デイドロの184項目とジョクールの145項目が続いており、残る者たちはそれぞれ数項目を執筆したのみであった。そして、サヴァリの事典を援用せず項目を執筆したのはごく一部に限られている。無署名項目を含め、『商業総合事典』を素通りして項目を執筆する者は少なかったのである。

もちろん、この調査のみで『百科全書』と『商業総合事典』の関係性の全貌を明らかにすることはできない。しかし、商業に関連する項目に限定されるとはいえ、『百科全書』の項目の多くで『商業総合事典』が参照され、その結果、『百科全書』を経由して、サヴァリの事典の記述が数多く18世紀中葉まで引き継がれ、定着していたといえるだろう。

1-3. 『商業総合事典』から『百科全書』パリ版にもたらされたもの

サヴァリの事典の特徴はいかなる点に求められるのか。また、そこから『百科全書』パリ版にもたらされたものはなにか。以下では、ジャン・クロード・ペローの研究を手がかりに、より詳しく確認したい¹¹。

サヴァリの事典は、商工業に関する事象を取り扱うゆえに、機械技芸を記述する事典としても『百科全書』の先駆的な存在であった。そして、単に機械技芸に関する項目を掲載しているという点のみならず、従来の事典のような事実と迷信がない交ぜになった記述から脱却しようと試みていた点で、両事典は共通していたといえるだろう。編纂に用いる資料の選択も、この方針に則った形で選ばれていたようである。典拠は四つのグループに分類される：①家業の系譜上、父の代から残された資料やマニュファクチュアの視察官であった他の兄弟からの情報；②個人的な蒐集家たちからの資料提供；③公文書の利用。事典編纂の目的が、そもそも通商および商工業に関する視察報告であるがゆえ、当然推測される資料である；④同時代に刊行された印刷物。アカデミーの論文集の他、ジャン・ピエール・リカール、レムリ、トゥルヌフォルといった人々の著作にも助けられたようだ。

これらの典拠資料をみると、サヴァリの事典から『百科全書』に流入した知識の年代もおおよそ推測できる。すなわち、父親から引き継いだ1660年代以降、同時代の1720年代以前である。事実、資料の大半は1695年から1715年に集められたという。『百科全書』パリ版に流入した知識はこの時代にまとめられたものだったのである。ジャック・ブルーストは、『百科全書』パリ版の記述について、技術革新にはまだ遠い、緩やかに醸成された技術集成の観を超えるものではなかったと指摘するが¹²、事実、その通りであった。サヴァリの事典を経由して『百科全書』パリ版に流入した記述は、17世紀中葉から18世紀初頭、つまり『百科全書』刊行の約半世紀前の知識だったのである。

両事典に共通する二点目の特徴として、口頭で交されていた知識の文字化と共有化が挙げられる。従来一部の実際的な商業活動の従事者に囲わ

れ、文字化されていなかった専門知識を収集および開放し、標準化を推進しようとしたのである。当然、反発の声も上がったようであるが¹³、その後の事典の受容を鑑みると、編纂者の方向性が時代の大きな流れと呼応していたのは疑いを得ない。項目作成のために職人のアトリエまで足を運ぶという『百科全書』の特徴も、サヴァリの事典の中ですでに認められる¹⁴。

また、読者層開拓の一環として、単に貴族による経済活動を擁護するのみならず、広く商業の有用性に光を当てることにより、政治経済の問題に関心を寄せる読者の目を引きつけた。そして、聖職者でもある編纂者のフィルモン＝ルイは商売に関する事典を作成するにあたり、以下のように述べている：

商売における善意や誠実さを確立し、維持する規則をもたらすのは教会の力によるものであり、また教会が、あらゆる職業、とりわけ取引で生み出される利益の監視役となりうるということを理解していただくのは簡単なことでしょう。なぜなら、利益が法に適っているかどうかを判断するのは教会であり、つまるところ、教会の戒律や掟に反しないのであれば、公共の利益になることに従事するのはまったく恥ずべきことでないからです¹⁵。

倫理的に悖る行為ととらえられやすい傾向にあった利益産出活動だが、フィルモン＝ルイは契約の誠実さと利益を得ることの正当性をキリスト教の倫理上に乗せたのである。『百科全書』に先んじて、社会における機械技芸や商業に新たな意義を見いだした『商業総合事典』であるが、記載された諸項目の背後には、カトリック教会の倫理観が潜んでいたととらえることも可能である。とはいえ、サヴァリの事典を通じて、『百科全書』パリ初版本がその倫理観をも取り込んでいたかは定かではない。なぜなら、商業の有用性とキリスト教の倫理観の擦り合わせは、すでに触れた「商人の手引き」でも行われていたからである¹⁶。つまり、フィルモン＝ルイの緒言は、聖職者としての言葉として受け入れられたのか、すでに通俗化さ

れた常套句として理解されたのか、どちらの可能性も否定できないのである。だが、当時、『家政事典』*Dictionnaire économique*を編纂したシヨメルや、のちに『商業総合事典』の新版編纂計画を趣意書にまとめたモルレなど、経済活動に社会的な有用性を認めようとしたのは聖職者の中に少なくともなかったようである。事実、*économie*という言葉に神学的な意味が含まれていることも指摘されている¹⁷。そして、『百科全書』パリ版で商業に関する項目を数多く執筆していたのが、他ならぬ聖職者のマレであったことはけっして偶然とはいえないように思われる。

以上のことから、『百科全書』パリ版は、『商業総合事典』の援用を通じ、前世紀末の知識を引き継ぎ、18世紀中葉に固定化したとみなすことができる。また、文字化もされず秘匿されてきた知識の共有化や、社会における産業および機械技芸の有用性に対する意識も引き継がれたといえるだろう。だが典拠として利用した事典の背後には、商業活動を倫理的に是認するための、イエズス会士の論理もぼんやりと反映されている。教会権力を糾弾し、イエズス会と衝突を繰り返した『百科全書』パリ版だが、自身もまた敵の論理に通低していたのだろうか。

2. 『商業総合事典』と『百科全書』ルッカ版

2-1. 『百科全書』イタリア異本版

『百科全書』パリ版の衝撃は国境を越え、ヨーロッパのみならず、大西洋をも越えた。イタリアでは、トスカナ地方のルッカとリヴォルノで異本版が刊行された。とりわけルッカ版(1758-1776)はパリ版の刊行にもっとも早く反応した版本である。ルッカ版とリヴォルノ版(1770-1778)は、それぞれフォリオ版本文十七巻、図版十一巻というパリ版と同じ構成であった。本文はパリ版とまったく同じであり、パリ版に集められた知識がそのままイタリアに流入したととらえることができる。だがその一方で、本文に脚注を付すことにより、イタリア異本版の独自性が打ち出されている。

脚注について論じる前に、まず、イタリアにおけるフランス啓蒙思想の受容についてまとめておこう。これまでの研究で共通して指摘されている

が、イタリアにおける『百科全書』の意義とは、なによりも科学技術に関する知識であった。論争の道具としてではなかったのである。『百科全書』パリ版刊行以前、すでにヴェネチアやナポリで、チェンバーズのサイクロピーディア *Cyclopaedia* が翻訳されていたことも、例として挙げるができるだろう。とはいえ、新たな知識に対するアレルギー反応も当然ながら存在していた。そこで、新旧思想の摩擦を減らすべく注目されたのが、すでに数学者として名を馳せていたダランベールであった。イタリアにとっての『百科全書』は、デイドロではなく、この人物による作品として受け入れられたのである¹⁸。

また、両都市はそれぞれ、独立国家（ルッカ）とトスカナ大公国に属する都市（リヴォルノ）という違いはあったが、ともに教会権力に対し、ローマ教皇庁の介入を拒絶する国権主義を共有していた。そして、イタリアにおける啓蒙や実学、経済学等への関心は、この国権主義の中で醸成されたという¹⁹。この思想的前提から、フランスとイタリアの都市国家の間を境にする、宗教と啓蒙思想というテーマが設定される。ここで、ルッカ版とリヴォルノ版の違いが浮かび上がる。1759年に起きた、『百科全書』パリ版の発禁事件に関連して脚注にも影響を受けたルッカ版こそ、教会権力に対する国権意識発揚の場として、イタリア啓蒙の問題が沸き立つ重要な舞台であった、という見解である。一方リヴォルノ版は、すでにレオポルド二世によって啓蒙思想を受け入れる土壌が出来上がっており、教会権力との関係は表立った問題には至ることもなく、注目には値しないという²⁰。

イタリア異本版の脚注には、上述の問題に直接関わる記述が数多く認められる中、『商業総合事典』を援用した脚注もいくつか存在する。『百科全書』パリ版の本文を通じてイタリアにも流入しているサヴァリの事典の知識に、さらに接ぎ木されているのである。では、どのように接ぎ木されたのか。なお、以下ではサヴァリ事典との比較をルッカ版に限定したい。なぜならリヴォルノ版では、ルッカ版の脚注を流用している箇所を認められるとはいえ、独自に『商業総合事典』を援用した確証が得られないからである。

2.2. ルッカ版が選んだ『商業総合事典』の版本

『百科全書』パリ版同様、ルッカ版の脚注には、参考文献名とその頁数が明示されている箇所がある。そして、記載されたページ数を頼りに、ルッカ版の用いた典拠の具体的な版本を特定できるようになる。この方法によれば、ルッカ版は1742年に刊行された『商業総合事典』を用いていたことが推測される。先に述べたように、『商業総合事典』はパリ系統とジュネーヴ系統からなる系譜があった。そして、ジュネーヴ系統の版本では、新たな項目の組み込みや加筆、訂正が行われていた。もちろん、すべての項目に変更が加えられていたわけではない。むしろ、変更されていない方が多い。本節では、まず『商業総合事典』の増補についてまとめ、その後『百科全書』ルッカ版がいかにかこの参考文献を利用し、情報を摂取していたのか確認しよう。

『商業総合事典』の1742年のジュネーヴ版は二つの出版者により刊行された。一方は、ヴォルテールの作品を刊行し、パンクックと一時期手を組み、新たな『百科全書』の刊行にも乗り出そうとしたことのある、後にジュネーヴを代表する書店に成長したクラメール書店 *les Héritiers Cramer* である。そしてもう一方は、アムステルダム有数の大銀行家であったユグタン家の系譜に連なる、プロテスタント家系のフィリベール書店 *les frères Philibert* であった。編纂に際して、ロラン・ガルサン *Laurent Garcin* (1683-1751) が協力している。グルノーブル出身の彼もまた、ナントの勅令の廃止によってヌーシャテルに逃れたプロテスタントの家系であった²¹。では、イエズス会士のフィルモン＝ルイによって最終的に完成された『商業総合事典』は、ジュネーヴにおいて、プロテスタントの立場から書き換えられようとしていたのだろうか。

編纂方針については1742年版の序論にその旨が記されているが²²、そこにはプロテスタントとしての意識はどこにも表明されていない。改変に際してもっとも重視されたのは、初版では情報が不十分のままに終わった、フランス国外に関する記述の増補であった。そして、この方針に沿って参考にした人名や著作が挙げられている。主だって参考にされたのはガルサ

ンの関係するロンドンの王立協会やフランスの王立科学アカデミーの報告、あるいは種々の旅行記だったようであるが、他にも挙げられたムロン、ウッドウォード、ラバ神父やアストリユックなど、名前の上での偏向は認められない。また項目の変更にあたっては、直接職人のアトリエに出向くことはないようであるが、サヴァリ兄弟の編集方針を踏襲する旨をはっきりと示し、事典の扱う範囲も商業、博物誌、機械技芸からかけ離れないよう自重している。その上、先に引用したフィルモン＝ルイの序言もそのまま掲載している。とはいえ、労働者の生産性や効率性の上昇、向上性の追及がプロテスタンティズムと結びつけられるとすれば²³、1742から1765年の決定版完成まで、その追及を支える知見を増補改訂し続けようとする精神は、図らずとも編纂者の宗教的戒律意識の顕れに他ならないと解釈できるのではないだろうか²⁴。またこの解釈を裏付けるにあたり、状況証拠とはいえ、当時のルッカでは、プロテスタントを育む環境にあり、さらに、その教義はプロイセンの商人から伝えられたといわれ、ルッカ版の編纂者のデオダーティの家系にもジュネーヴに移住したプロテスタントがいたことも指摘しておきたい²⁵。

以上のことから、『商業総合事典』のジュネーヴ・コペンハーゲン系統は、カトリックの人間に編まれたパリ系統と異なり、プロテスタント色が強くなっているとみなすことができそうである。すると、1742年に刊行された版本にそのまま記載されたフィルモン＝ルイの口上について、少なくとも、すでに常套的な商業顕揚の口上に過ぎないと見なす向きが皆無であったとはいえないように思われる。

2.3. 「商人の手引き」の帰還：パリ－ジュネーヴ－ルッカ

再び、ルッカ版に戻ろう。ルッカ版の中で明示的にサヴァリの事典の援用が認められるのは二巻から七巻までである。具体的には、「BAMBOUC」(博物学、植物学)、「BANIANS ou BANJAN」(教会史)、「Baume de Giléad」(植物)、「Bleu de Prusse」(無分類)、「CAFIA」(商業)、「CALAMINE」(鉱物学、冶金学)、「CALEBASSE」(博物学、植物

学), « Charbon Minéral » (博物学、鉱物学), « Chaux commune » (無分類), « CISEAU » (機械技芸), « CORAIL » (博物学、昆虫学), « Droits du Roi » (金融), « FARD » (美容術), « FRUIT » (農村経済), « FUMAGE » (法学), « GINGUANS » (商業)の十六項目であった。括弧内は分類符号である。『百科全書』の分類符号に合わせると、博物誌、金融、商業、機械技芸という、『商業総合事典』で取り扱われている領域に合致する場合が多い。また、これらはサヴァリの事典を援用して執筆された項目ではない。ルッカ版では、同定可能な十三名の協力者のうち八名がカトリック系の聖職者であったが、サヴァリの事典を用いて脚注を付したのは、署名のない四項目 (« FARD », « FRUIT », « FUMAGE », « GINGUANS »)を除き、すべてディオダーティの手によるものであった。そして、ほぼすべてが1742年のジュネーヴ版で新たに書き加えられた箇所から引用されている。

サヴァリの事典を用いた脚注をパリ版と比較すると、全体的に大幅な方向転換は認められない。『百科全書』の本文の筋に沿った形で、新たな情報が補足されているという傾向がある。『百科全書』パリ版の項目執筆者を確認すると、デイドロ、マレ、ドルバック、ドーバントンなど、特定の執筆者に的を絞って脚注を付した形跡も見受けられない。記述の更新は、元の記述の否定ではなく、追加という形で進められている。上述の項目が脚注の対象に選ばれた理由は判然としないものの、先に触れた当時のルッカの状況を踏まえると、経済活動に関する情報の最新化が求められていたのも当然であろう。しかし、この知識の追補の過程で、『百科全書』の項目を、経済的に有用と思われる記述で覆す箇所も存在する。たとえば、マレによって書かれた項目 « BANIANs ou BANJAN » では、大まかにではあるが、「生き物を食さない、極度の潔癖性、神とみなす卵大の石をペンダントとして身につける習俗をもつ信心深いインド人のセクト」と本文に記述されている。それに対し、ルッカ版では以下の脚注が付せられている：

バナヤンたちはインドに住むもっとも有能な商人である。

ペルシャ、とりわけイスパハンやベンデル＝アバッシに多くのバニ

ヤンがいる。彼らの大半はとても金持ちだが、一ソルの儲けがあるならば、もっとも瑣末でさもない取引にも従事する。大半の者は勇敢であり、フランス、イギリス、オランダの東インド会社の主要な仲買人はこの国の出身である。そのうえ、彼らはとても忠実であり、ほとんどいつも会社の金庫番の役割を担っている。

彼らは両替商でもあり、(中略)好きな時に出し入れできる一種の貸金庫をもっている²⁶。

宗教とはなんら関係ない職業人の誕生である。そして、現代のインド商人に直結する意味が現れている。つづいて項目「FUMAGE」はどうだろうか。プーシェ・ダルジによって執筆され、法律に分類される項目である。本文の記述では、「邸内の家事に従事する外国人に対して貴族が負う権利」とされている。脚注を確認すると：

金銀の針金工の間でいう、ある煙や独特の香水に晒すことによって糸状や薄板状にした銀に付ける、偽の金色のことである。裁決等で禁じられている。(途中省略)。こうし たひどい商売をするような卑劣な針金工は、この詐欺行為を巧妙に隠すため、いつも銀を暁色の絹の上に銀を並べているということにも留意しなければならない²⁷。

省略された箇所には、詐欺の手口の説明が続けられている。法律に関わる事項であるのは確かであるが、本文の内容を大幅に逸脱し、商人や職人の生態を描き出すことに移行しているといえなくもない。これは一例に過ぎないが、ジュネーブで獲得された新たな知見は、教会権力に対する国権主義の保持を背景にした経済活動への関心の高まりの中、ルッカ版に導入されていた。そして、それを用いた脚注は、ときに『百科全書』パリ版の内容を大幅に刷新する場合もあったのである。

視点をサヴァリの事典に移そう。はじめてイタリアで「商人の手引き」が書かれた時、そこには、旅を通じて獲得した、商人の個人的な肉声が反

映されていたにちがいない。そして、個人的な知恵は、サヴァリ兄弟を通じて事典の形式を獲得した。その後、『百科全書』に取り込まれることによってさらに広く伝播し、再びイタリアに戻ってきたといえる。しかし、事典形式になることによって、個人的な声は一般的な性質を獲得すると同時に、最新とはいえアルファベット順に分断された知識となり、もはや一人の中で統合されていた知恵とは異なるものに変容していたのではないだろうか。

『百科全書』の人間知識の体系詳述における商業の位置は、最末端にある。この最末端の領域に含まれない知識とはいったい何だろうか。あるものは分類不能という一種の万能ラベルを貼られて、いつかしかるべき領域に配置されるために待機しているかもしれない。だがあるものは、文字化されることがないまま、記憶の忘却にさらされていたのかもしれない。

おわりに

本論では、『百科全書』パリ版とルッカ版における『商業総合事典』の利用方法の違いを比較することによって、サヴァリの事典の変遷を追ってきた。また同時に、サヴァリの事典の変化を追跡することにより、『百科全書』の伝播様態を探ろうと試みた。だが本論では、事典変遷の概略を描いたに過ぎない。『百科全書』に取り込まれる際に抜け落ちてしまった『商業総合事典』の項目の調査による、啓蒙思想伝播のより克明な記述を今後の課題としたい。

註

- 1 Kafker, Frank A., *Notable encyclopedias of the seventeenth and eighteenth centuries : nine predecessors of the Encyclopédie*, Oxford, Voltaire foundation, SVEC, No. 194, 1981. 小関武史, 「『百科全書』研究にとっての典拠調査の意義」, 『一橋論叢』, 123号, 2000年, p. 704-718.
- 2 Kafker, Frank A., *Notable encyclopedias of the late eighteenth century : eleven successors of the Encyclopédie*, Oxford, Voltaire foundation, SVEC, No. 315,

1994. 逸見龍生, 「書物としての『百科全書』: 18世紀ヨーロッパ『百科全書』異本ネットワーク」, 『欧米の言語・社会・文化』, 12号, p. 1-18, 2006.
- 3 Savary des Brûlons, Jacques, « AVIS DU LIVRAIRIE », *Dictionnaire universel de commerce*, Tome III, Paris, J. Estienne, 1730.
- 4 大黒俊二, 「コルトッリ・ベリ・サヴァリ: 「完全なる商人」理念の系譜」, 『イタリア学会誌』, 37号, 1987, p. 57-75.
- 5 Perrot, Jean-Claude, *Une histoire interculturelle de l'économie politique*, Paris, Éd. de l'École des hautes études en sciences sociales, 1992, p. 97-125.
- 6 Savary des Brûlons, Jacques. *Dictionnaire universel de commerce*, Tome I. Paris, la Veuve Estienne, 1750, p. LVIII.
- 7 Morellet, André, *Prospectus d'un nouveau dictionnaire de commerce*, Paris, Estiennes frères, 1769, p. 9.
- 8 副題は変化している。1748年の版本までは、「*contenant tout ce qui concerne le commerce qui se fait dans les quatre parties du monde*」であるのに対し、1750年のジュネーヴ、1759年のコペンハーゲン版本は「*d'histoire naturelle, & des arts & métiers*」となっている。
- 9 拙論, « *Aux sources de l'Encyclopédie : les éditions du Dictionnaire universel de commerce utilisées par les encyclopédistes* », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, No. 45, 2010, p. 153-159.
- 10 <http://encyclopedie.uchicago.edu/>
- 11 Perrot, Jean-Claude, *Op. cit.*
- 12 Proust, Jacques, *Diderot et l'Encyclopédie*, Albin Michel, 1995 (première édition 1962), p. 161-188.
- 13 Vignols, Léon. « Le dictionnaire universel du commerce de Savary des Bruslons . L'opinion des négociants nantais en 1738, etc » . *Annales de Bretagne*, No. 38(4), 1928, p. 742-751.
- 14 Savary des Brûlons, Jacques, *Dictionnaire universel de commerce*, Tome I, Paris, Veuve Estienne et fils, 1748. p. XV-XVIII.
- 15 Savary des Brûlons, Jacques, *Ibid.*, p. XXVII
- 16 大黒俊二, *Op. cit.*
- 17 大田一廣, 「『百科全書』におけるエコノミーの概念」, 『龍谷大学経済学論集』, 51号, 2012, p. 16-25.
- 18 E. Levi-Marvano, « Les éditions toscanes de l'Encyclopédie », *Revue de littérature comparée*, No.3, 1923, p. 213-256. Venturi, Franco, « L'“Encyclopédie” et son rayonnement en Italie », *Cahiers de l'Association internationale des études françaises*, No. 3(3-5), p. 11-17, 1953, Rosa, Mario,

- « Encyclopédie, « Lumières » et tradition au 18e siècle en Italie », *Dix-huitième siècle*, No. 4, 1972, p. 109-168.
- 19 堀田誠三, 「『百科全書』リヴォルノ版について - オーベールの手紙から -」, 『福山市立女子大学紀要』, 37号, 2010, p. 29-36.
- 20 Venturi, Franco, *Ibid.*, もちろんこのような見解は、あくまで宗教と啓蒙思想の関係性からもたらされたものである。ピエトロ・ヴェツリを仲介にしたイヴェルドン版との関連など、啓蒙思想の伝播という観点では、リヴォルノ版は依然として重要な文献であることに留意する必要があるだろう。
- 21 Sgard, Jean, Candaux, Jean-Daniel ed., *Dictionnaire des journalistes, 1600-1789*, 項目 « Gédéon PHILIBERT », および, « Laurent GARCIN ».
<http://dictionnaire-journalistes.gazettes18e.fr/dictionnaires-presse-classique-mise-en-ligne>
- 22 Savary des Brûlons, Jacques, « AVIS SUR CETTE NOUVELLE EDITON », *Dictionnaire universel de commerce*, Tome I, Genève, les héritiers Cramer et les frères Philibert, 1742, p. XXXVII-XLI.
- 23 ヴェーバー, マックス, 大塚久男訳, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 岩波文庫, 1989.
- 24 フィリベール書店は1745年に *Journal historique du commerce et des arts et manufactures* という雑誌も刊行している。Cf. Sgard, Jean, Candaux, Jean-Daniel ed., *Op. cit.*, 項目 « Gédéon PHILIBERT ».
- 25 堀田誠三, *Op. cit.*
- 26 *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* - Seconde édition, enrichie de notes, & donnée au publique par M. Octavien Diodati., Lucques, Tome I, 1758, p.51.
- 27 *Ibid*, Tome VII, p. 331.